

疾晦淫惑疾、明淫心疾、女陽物、而晦時淫則生內熱惑盡之疾、今君不節不時、能無及此乎、

〔奇魂一〕病源論 并病名考

漢様にのみなりて、古の病名詳ならねど、猶古書に求て、有ん限は、此の風によむべきわざ也、さて古と今と名同くて病異なる、漢名にのみ唱て、古名を失たると、古と今と多し少しとあり、古今名同く病異なるは、續紀天應元年に、詔曰、朕枕席不安、稍移晦朔云々、詔曰云々、加以元來風病爾苦々云云とみえ、後紀四年にも、天皇、自從去春、寢膳不安云々、詔曰云々、朕躬元來風病爾苦々榮華物語にも、なほこの殿は、ちいさくより、風おもくおはしますとて、かせの療治どもをせさせ給此猶多し、等有を考ふれば、状も定らず、常あつしくて、年普く痼疾と成れるを云にて、今俗にいふ痼とみえたり、今世にいふ風の病には非る也、

〔本朝醫談〕四百年前、人の引こもりし時、濕熱の病とも見えすと云ふ事あり、濕熱といふ事は、宋人よりいひ出して、丹溪に至て、其説大に行はる、唐土の古人は、萬病皆風寒より起ると心得たり、傷寒論も其意なり、されば病人十に七八濕熱の劑を用ふ、丹溪の發揮せし局方の藥も、宋の時初て作りしにもあらず、古人乳石を服する餘意なり、乳石は魏晉六朝より唐まで流行して、服する人寒食冷飲して其熱毒を解するに至る、其禍を蒙るもの少からず、こゝに於て宋の諸老病の因は、風寒は少く濕熱多しといふ説を立しなり、是説おこらざりせば、五石散の害、今の世までも傳るべし、斯邦にも仁明帝自ら五石を煉給ひし事あり、三條院金液丹をめしたり、其藥くひたる人は、目をやむと大鏡にみえたり、平相國の身火のやうになりたるも、已に富貴きはめつ、若くは欲にあかずして、乳石の劑を服せられし歟、夫唐土の州域は南北甚廣し、北土の病風寒によるなれば、熱藥によろしかるべけれど、南土の人は風寒の病少く、濕熱の因多し、これによりて南北經驗の説出たり、大成論には病門毎に暑濕をいひて、風寒の二因ばかりに